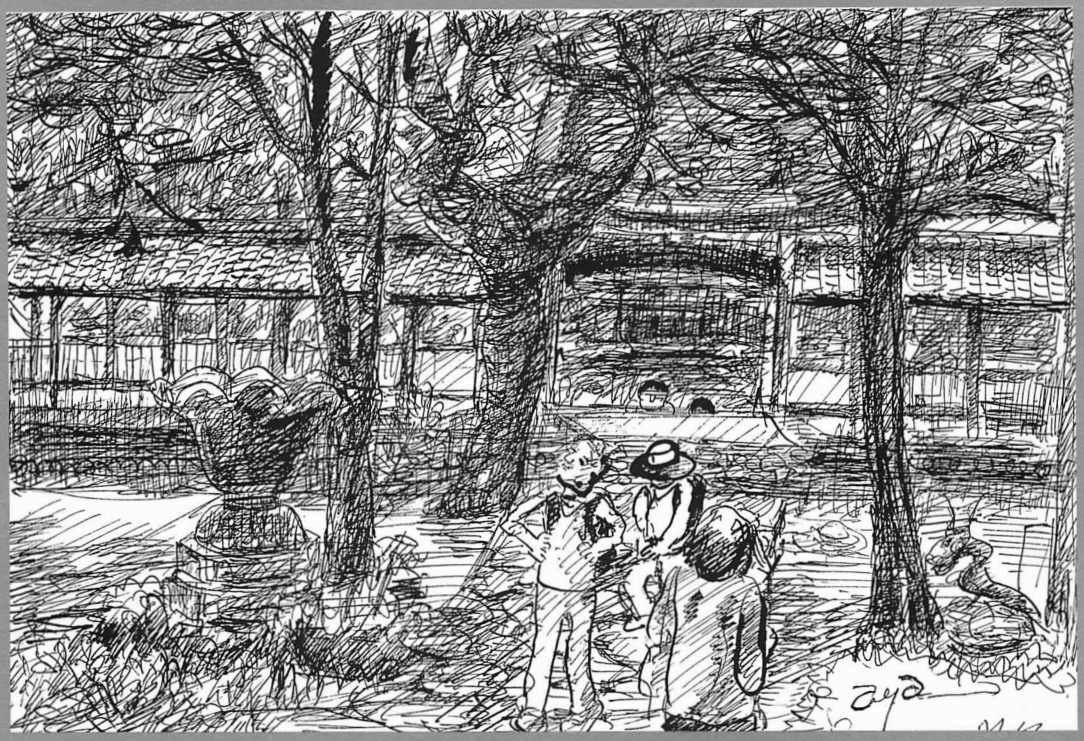
まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL63



城川町　龍沢寺

特「時代が変わる 何かが芽生える」集

—情報が拓く新たなまちづくり—

- 新宮村の入り口「霧の森菓子工房　松山店」
- 今治コミュニティーFM放送に向けて
- 弓削島ネットワークプロジェクト
- ハイテクネットワークによる農業活性化
- 地域づくりのための情報ネットワーク

■アングル
北海道　ニセコ町長
逢坂　誠二

■論談　まちづくり
松山大学経営学部教授
墨岡　学

■キラリ光るまち
富山県　山田村助役
小西　源清

好評連載

★歩キ目デス＆足ラテス
岡崎　直司

アングル
情報化のパラドックス……北海道ニセコ町長／逢坂　誠二……1
特集『時代が変わる　何かが芽生える』
―情報が拓く新たなまちづくり―
新宮村の入り口「霧の森菓子工房　松山店」……新宮村／永田　茂孝……2
今治コミュニティＦＭ放送に向けて……今治市／岡平　知子……4
弓削島ネットワークプロジェクト～高専の目指す地域連携～……弓削町／長尾　和彦……6
ハイテクネットワークによる農業活性化……内子町／森本　純一……8
地域づくりのための情報ネットワーク……久万町／宇都宮栄一……10
論談ーまちづくりー
まちづくりとネットワークの出会い……松山大学経営学部教授／墨岡　学……12
キラリ光るまち
地域づくりと情報化～「電脳山田村」の挑戦～……富山県山田村助役／小西　源清……14
リレーでちょっトーク
宝物は島の仲間たち……岩城村／島本　計治……16
住めば都―私の生きる道―……新宮村／藤川　美紀……17
風おこしのちかい
まちづくりの原点にかえって……五十崎町／河畠　登紀……18
研究員レポート
まちづくりの先進地は今　～大分県大山町・湯布院町を訪れて～……沖田　敏広……20
まちセン事業レポート’９９秋　～初心忘るべからず～……檜垣　明宏……22
MY TOWN うぉっちんぐ　歩キ目デス＆足ラテス
伊予路の端々橋巡り　パートⅡ……岡崎　直司……24
〈はみ出しコラム“ウォッチャー岡崎の目”〉
旧大西屋解体顛末記……岡崎　直司……26
まちせんホームページ新着情報から
〈地域づくり団体全国協議会・㈶ニューにいがた振興機構〉……28
〈肱川町・三瓶町〉……29

特集「時代が変わる　何かが芽生える」

今号のテーマ
情報が拓く　新たなまちづくり

近年、新聞などを見ていても「情報化」という文字を目にしない日はありません。

単に情報化といっても「まちのＰＲ」「コミュニティの活性化」「広域連携の強化」「医療・福祉面での利用」「学校教育」等、今後のまちづくりには欠かせない手段の一つになってきています。また、この情報の使い方次第で、大きな差が生まれるとも言われています。

しかし、情報というものは、人が人に伝えるものであり、人と人との顔が見える繋がりがあってこそ生きた情報と言えるのではないでしょうか。

そこで今号では、これからのまちづくりの鍵を握っている「情報」をまちづくりにうまく利活用しているところにスポットをあてて特集を組んでみました。

（編集子　檜垣）

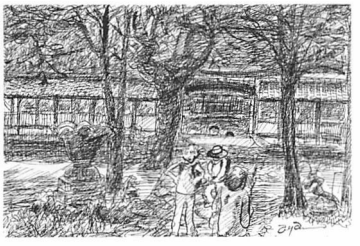
表紙の言葉

城川町から更に三十分山裾を縫うように走ると、杉木立がもっこり山を作っているように見えてきた。

森林浴の森日本百選に選ばれた自然公園、龍沢寺。鎌倉時代の創建。屋根付き橋を渡り、中門では立派な龍の彫物を見つける。

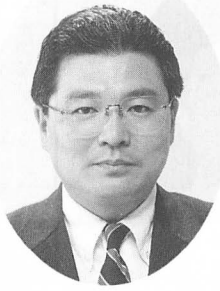
本堂までの長い石段には高く伸びた杉の木が道案内。本堂が見えてくるまでの距離には胸も高鳴る。

柳原　あや子



情報化のパラドックス

北海道ニセコ町長
逢坂　誠二



情報化は、今の時代を象徴する重要なキーワードの一つだ。

私は、今から二十年ほど前に学生実習のデータ解析のため、初めてパソコンに接した。その後、パソコンと電話回線を利用して友人とデータのやり取りを始め、その発展形態としてパソコン通信にのめり込んだ。また、パソコン上でワープロソフトや表計算ソフトなどが動くようになり、使いようによっては仕事の効率が一気に向上した。パソコン通信も参加者の増加と内容の充実によって、その有用性が加速度的に高まった。その後、インターネットへ発展し、現在は、結構な数の人が日常的にコンピュータを使い、しかもその多くがネットワークの中で作動している。

私の現在の職場でも、コンピュータなしには、仕事が一歩も進まない状況だ。また個人的にも、原稿のやり取りなどの重要な情報交換もコンピュータを介して行うことが多い。しかも、持ち運びに便利な機器の登場で出張先からも、さほど不自由なく情報のやり取りができる。このように、ここ二十年の私個人の動きからも、情報化が確実に、しかも早い速度で進んでいることがわかる。

こうした中で、情報化のメリットがさらに声高に叫ばれている。また最近は、情報の保護、セキュリティなど、情報化の負の面についても関心が高まっている。このどちらも重要なことだと思う。

しかし、私はこれ以外に、情報化にはパラドックスが潜んでいるような気がして仕方がない。

情報化によって、時間、場所を問わず多くの人と情報のやり取りができる。反面、私たちは人が集中するという呪縛から逃れることができない。この良い例は、シリコンバレーかもしれない。また不特定多数の方々と情報の交換ができるようになったが、インターネット内の閉鎖的な小グループだけの価値に満足する傾向も見える。広い範囲から瞬時に情報を収集することも可能になったが、インターネットに拘泥するあまり、個人の手元にあるデーターベース化されていない情報を見逃してしまう。情報化で事務効率が高まったが、機器やプログラムの能力の範囲内だけで対応しようとするあまり、実は利便性、満足度が低下していることもある。

つまり、時間、場所を問わず、広く、早く、効率よく、しかも便利に、情報のやり取りや利活用ができるのが情報化のはずだが、情報化の進展によって、その意図する方向と全く逆説的な現象（パラドックス）が起きているのだ。

かつて、顔も名前も知らない多くの方々とパソコン通信に熱中していたころ、我々が大切にしたのは、直接会ってミーティングをすることだった。時間も場所も肩書きも関係なく情報交換や論議ができる便利な道具を手にしたのに、最も初歩的な情報交換手法から離れることができなかったのだ。このことが何を意味するのか、私にはまだ分からない。しかし情報化の利便性の背景に潜む、こうしたパラドックスを常に意識しておくことが大切だと感じている。

★ニセコ町ホームページ
http://www.town.niseko.hokkaido.jp/

★逢坂誠二町長のホームページ
http://www5a.biglobe.ne.jp/~niseko/

特集 ”時代が変わる 何かが芽生える“ ―情報が拓く新たなまちづくり―

新宮村の入口
『霧の森菓子工房　松山店』

霧の森　ゼネラルマネージャー
（新宮村）　永田茂孝

ついに山暮らし？

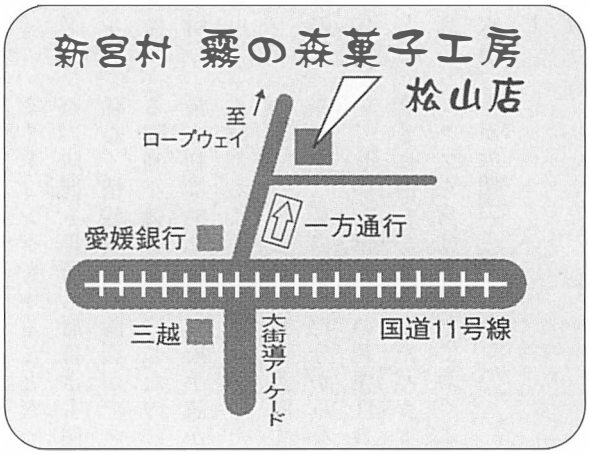
平成十年七月に「新宮村・霧の森」ゼネラルマネージャーの全国公募があり、神奈川県横浜市からこの村に引っ越してきました。山が好きで、「いつかは山暮らし」と思ってきました。来てみると、自然が湧き出しているような村です。今まで思い描いてきた生活に近づいたつもりでした。しかし、新しい施設、しかも異業種の立ち上げは、そんなのんきな考えを吹っ飛ばしてくれました。

新宮村は愛媛県の東端の村。高知県と徳島県に隣接し、川之江市を挟んで香川県とも近い四国のヘソのような位置にあります。四国の村としては唯一、高速道路のインターチェンジがあるところです。そんな村ですから知名度は低く、辛うじて「新宮茶」の産地として知る人ぞ知る村です。そこに観光施設ができて、その総指揮に携わることの大変さはまだわかっていません。「こんな山の中にお客様が来て下さるだろうか。」そんな不安を抱えながら立ち上げの準備を進めていました。

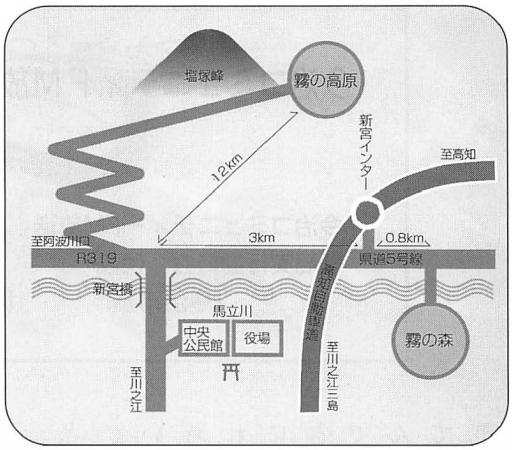
松山のアンテナショップ

広告塔開店

平成十年十一月から菓子・豆富（とうふ）工房のトレーニングに入るスケジュールが決定し、菓子・豆富がどんどん出来るけど、その出来た製品をどうしようかという時に、アンテナショップを出すことにしました。お菓子、豆富を売りながら、「新宮村」と「霧の森」の宣伝も兼ねるお店を作ることになりました。霧の森のイメージを思い浮かべながら店内のデザインを造りました。出店場所は、愛媛県の県庁所在地「松山」、オープンは四月一日、霧の森グランドオープンの約二ヶ月前です。松山の方々に霧の森を告知するには



霧の森



▲新宮村の霧の森と霧の高原

知県？　徳島県だっけ？」「へー、結構近いんだ。今度行ってみよう。」このようなご返事が数多く帰って来ました。これだけでも、アンテナショップの第一の目的は十分に達成できたと思っています。また、オープニングセール期間中は商品が物によって予想以上に売れて、朝まで商品を作っていました。これまた十分に目的が達成できました。

「松山のお店で聞いて来ました」

五月二十五日に霧の森グランドオープンを迎え、しばらくはごったがえしていましたが、お客様とお話をする余裕ができると、「松山のお店で聞いて来ました」という声をたくさん聞くことが出来ました。村のイベントや霧の森（コテージ・レストラン料理など）のご案内によって、多くのお客様に来ていただきました。コテージの予約も、今までは近隣の町の方がほとんどだったのが、圧倒的に松山からのお客様が増えました。松山における広告塔としての役割は計り知れないものになりました。それに加えて、報道関係者の方々にも松山のお店をご利用いただきました。すると、ちょっと変わったお店として多くの取材を頂戴いたしました。そこにまた、計り知れない広告効果がありました。

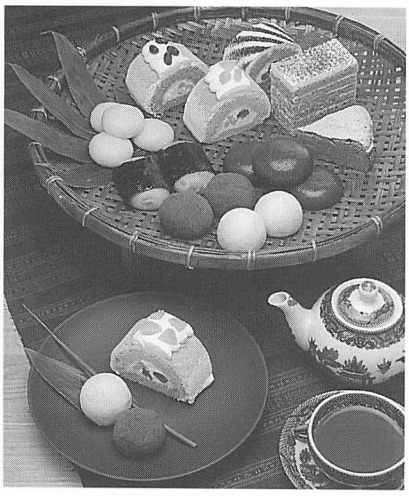
お客様との「交信中継基地」

今、松山店のお客様は「新宮村に行って来ました。」と訪れるお客様が多くなりました。あれこれ感想を聞かせていただく大事な場所になって来ました。情報発信だけでなく、お客様の声を頂戴できる受信アンテナとしても重要な役割を担っています。松山店自体もお客様に飽きられることのないように、お菓子に新製品開発を続けて行くとともに、お客様から頂戴したご意見を取り入れて、「ちょっと新宮村に行ってこようか。」と思っていただけるよう、基本を損なうことなく変化を続けて行きたいと思っております。

関係各位のご協力に御礼を申し上げると共に、「霧の森」は〝ほっ〟っとしていただく場所として、皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

ちょうどいいタイミングだったと思います。

そして松山店オープン。お客様に新宮村をご案内したところ、「新宮村ってどこ？　高



▶菓子工房の販売商品

★霧の森ホームページ
http://www.kirinomori.co.jp/

★新宮村ホームページ
http://www.islands.ne.jp/shingu/

特集 ”時代が変わる 何かが芽生える“ ―情報が拓く新たなまちづくり―

今治コミュニティＦＭ放送に向けて

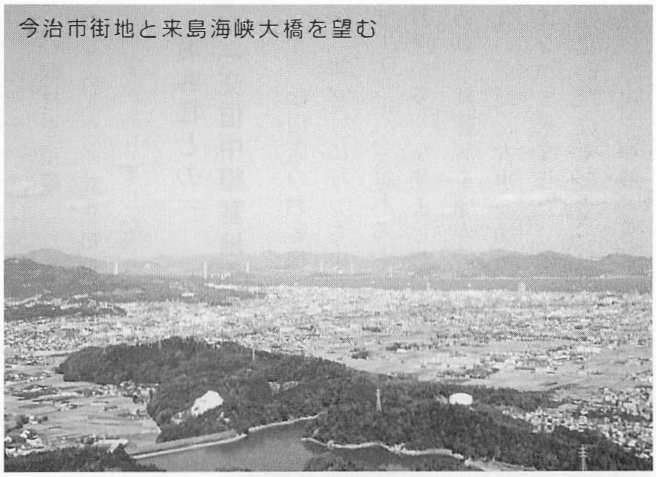
今治コミュニティーFM放送
開局実行委員会　代表
（今治市）　岡平知子

はじめに

私の住む今治市は、造船とタオルの町、そして白砂青松に恵まれた美しい町です。しかし、今治の人々は、今治が好きか？と問うと、即答で「好き」と言う人は少なく、「好きになりたくても…」などと返ってくる。

架橋によって今治を知らない人々がやって来ると思った時、今治に来た人々が再び訪れてくれ、又楽しんでもらうには、その地に住む人達が生き生きと楽しそうで「いい町でしょう、この町が大好きなんです」という顔をして歩いていることと思った。そんな町こそ輝く魅力的な町ではないか、そんな事を日々考えていた。

ではどうすれば自分達の町今治を大好きになれるのか。それは、我町今治を、もっともっと知ることだろう。今やボタン一つで世界の事が分かってしまう世の中、しかし、身近の情報はというと、それほど多くも、詳しくも知らない。架橋を迎える今、二十一世紀を目前に今こそ身近の情報を交換し合い、育て合い、愛し合うことのできる何かを始める絶好のチャンスだと考え、それには今、コミュニティＦＭ放送が一番効果的で、必要なものだろうと思った。


今治市街地と来島海峡大橋を望む

コミュニティ放送って？

コミュニティ放送とは、郵政省の免許を受けて開設するもので地域情報というテーマのもとに制度化されている放送メディアで、従来の民間放送と地域における位置付け、放送局の役割は全く異なるものだ。地域住民にとって必要で、真に有益な情報が、コミュニティ放送を介することによって有効利用され、地域経済の活性化、住民の利便性の促進を図ることが可能になる。さらに地域の問題の掘り起こしに取り組んだり、文化活動の援助など、いわゆる地域住民による地域住民の為の放送番組を制作、提供し、住民と共に地域の活性化、文化向上の担い手となるものだ。

あの阪神淡路の大震災の時、神戸のコミュニティ放送局「FMわいわい」は、電話も電気も何もかも活用できなくなったあの時、電波だけは住民

へ届けることが出来たので、住民の誘導をしたり、安心感を提供したりと大活躍したことは世界的にも有名だ。

この様に、多メディア多チャンネル化が進む中において、地域をひとつのコンテンツと捉えるなら、これ以上強力なコンテンツはなく地域がコミュニティ放送を活用することによってコミュニティ自体を豊かにしていけるのだ。

思い立った私は、友人の主婦二人に相談し、次の日の平成九年十月一日早速郵政省の電気通信監理局無線通信部放送課を訪ねた。「電波ってどんなものですか」の私達の質問に、初めは驚いた様子だったが、次々の質問に丁寧に教えてくださり、又多くの関連の本も紹介してもらった。少しでも分からないと即出かけて行ったり電話をしたりして私達の頭の中はコミュニティ放送一色になってしまった。

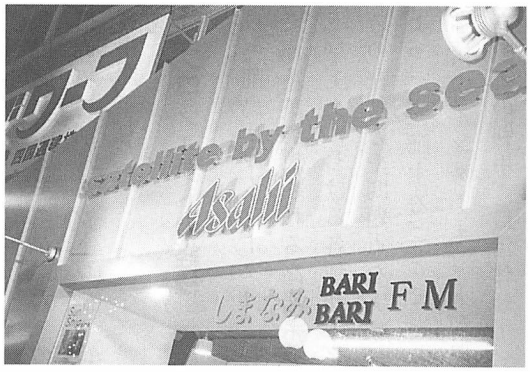
そして私達は実行委員会を設立した。多職業多年齢で二十人ほどで始めた。何度か実行委員会を開き、現実と夢の間で、さまざまな意見でいつも時間が不足だった。そしてビラを作り、パーソナリティを広く市民に公募し二十数名の全くの素人という人達が仲間に加わった。委員会の度に少しずつ集めたお金でスタジオを借り練習に励んだ。

「イベントFMでの生放送」（写真：愛媛新聞社提供）

イベント放送

そんな時、常に相談に乗っていただいていた市長から、架橋イベントのイベント放送をやってみてはと言われた。市民にコミュニティ放送を理解してもらう良いチャンスと考えイベント放送をする事になった。七月二十日の開局と決めたのは六月の末、一ヶ月もない中で準備ができたのも、みんなのコミュニティ放送への思いが強かったからだろう。局名は、「しまなみBARIBARIFM」、コミュニティ放送では「ラヂオBARIBARI」と決めていたので、そうつけた。BARIは今治の「治」である。番組の中に「今治スキスキ宣言」があったり高校の放送部の子達がニュースを読んだり、三十数人のスタッフで七十二日間をやりぬいた。とにかく「こんな元気な若者達がいる今治も捨てたもんじゃないなぁ」という声が一番多かった。最後の一週間のFAXの数もすごかった。迷子になった犬が、たくさんの情報をいただき見つかったりもした。又市民全部の声を電波に乗せるのを目標に一日に、最低三人のゲストを迎えた。その他、「バリッ子大集合」「野放しの主婦達」などなど多くのアイデア番組を送った。何といっても楽しく輝いた'99年の夏だった。そして今、コミュニティ放送開局へ、最後の仕上げに入っている。

今、私は今治が大好きだ。



今治港のサテライトスタジオ

★今治市ホームページ
http://www.islands.ne.jp/imabari/

特集 ”時代が変わる 何かが芽生える“ ―情報が拓く新たなまちづくり―

弓削島ネットワークプロジェクト
～高専の目指す地域連携～

弓削商船高等専門学校
情報処理教育センター長
（弓削町） 長尾和彦

島の架け橋

弓削商船高等専門学校がインターネットに常時接続されたのは平成八年三月のことである。一時間に一回の電子メールのやり取りから二十四時間接続への変化は、連絡船しかなかった島に橋が架かったようなものである。情報検索やファイルのやり取りなど、もはやインターネットなしの活動は考えられないまでに浸透している。

弓削島ネットワークプロジェクト発足

一方、弓削町CATVは難視聴地域解消の目的で同時期に開局された。局から家庭への一方的な放送だけでなく、双方向の通信が可能なシステムである。その活用方法について本校に相談があったこともあり、CATV回線をコンピュータ用の回線として利用し、弓削島全体をネットワーク化する弓削島ネットワークプロジェクトが発足した。本プロジェクトは本校の教育設備計画に基づいており、官学共同のユニークなプロジェクトとなっている。

平成八年当時、日本でCATVインターネット事業を行っていた業者はほとんどなく、一部のCATVで実験的に行われていた程度である。その後、あちこちでCATVサービスが始まったことから、この年がCATVインターネット元年であったといえよう。本プロジェクトでは、本校側がCATV用のヘッドエンド、PC及びモデムを準備した。CATVインターネット免許が必要なため、運用実験として二年間の免許（その後一年延長）を取得した。

機器の設備工事には全て筆者が立ち会ったが、一般家庭は簡単に接続ができるのに、小学校などでは困難を極めた。暑さの中ケーブルを辿って小学校の中を走り回ったり、屋根に登ったことは良い思い出である。

こうして平成八年七月から、学校（四）、CATV、役場、公民館、家庭モニタ（六）の構成で弓削島ネットワークは運用開始した。

プロジェクトの経緯

弓削島ネットワークは、将来普及が予想される高速ネットワークにおける各種サービスの在り方や問題点を実験によって検証することであり、学校のインターネット利用、高齢者の利用、自治体サービ

ス、インターネット普及などを対象とした。以下、年度順に成果を示す。

〈平成八年度〉国際会議「テレポート，96」で弓削島ネットワークのコンセプトが優秀賞を受賞したのを始め、複数の学会において発表を行った。発足直後にはＮＨＫや新聞等にも取り上げられている。町内の婦人会、役場職員を対象にインターネット利用講習会を実施した。

〈平成九年度〉学生による利用講習会を継続し、電子メールの利用率の向上につながった。学校におけるインターネット利用について「一〇〇校プロジェクト」の実施内容にあわせて、小中学校を対象とした特定の科目向けの教材を作成した。

〈平成十年度〉高齢者を対象とした端末・サービスの調査を実施した。この結果を受け、端末の文字の大きさを自動的に変更するシステムの構築を行った。また、国土庁主催の「アイランダーサミット」において、弓削島ネットワークの回線を利用してＴＶ会議が行われた。

運用実験をふりかえって

三年間の運用実験終了後、利用の変化についてアンケート調査を行った。この結果、ネットサーフィン、電子メール交換、教材への活用などネットワークの利用が進んでいる。また、弓削町のホームページ作成、インターネット接続など、インターネットの普及にも貢献することが出来た。

一方、この三年間の運用実験の間、機器故障や停電・気象異常によるシステム停止が五回発生した。機器修理のための予算がなく、故障に対処することが困難な状況であったが、幸い本校の担当者が代替機の提供等で対応することができた。局側の機器障害はシステム全体の障害となるため、運用時には十分な対策を備えておくことが必要である。

高専と弓削町の連携

現在、弓削島ネットワークプロジェクトは運用実験期間を終え、休止状態にある。現行のシステムをそのまま運用することで、弓削町内の通信手段として利用することが可能である。弓削町の検討を期待したい。

また、小中学校でのインターネット導入も進められているが、個別に接続を行っていては、コスト面や通信品質で非効率となる。弓削町ＣＡＴＶがインターネット事業を展開することは予算上問題があることは十分理解できるが、検討する価値は十分にあるだろう。

さらに、高齢者向けの端末のモニタ調査や次世代型通信機器、福祉機器、サービス等の運用実験の場として、弓削島ネットワークプロジェクトが継続・活用されることを期待している。地域情報化を推進するためには、講習会など継続的な活動が必要である。本校が地域情報化・活性化の一助となれば幸いである。

★弓削商船高等専門学校ホームページ
http://www.yuge.ac.jp/

★弓削町ホームページ
http://www.islands.ne.jp/yuge/

特集 ”時代が変わる 何かが芽生える“ ―情報が拓く新たなまちづくり―

ハイテクネットワークによる農業活性化

内子フレッシュパークからり農業情報センター
（内子町）　森本純一

からり市場の実験

「内子フレッシュパークからり」は町民と行政の合同出資（資本金二千万円）で第三セクター方式のかたちをとって運営している会社です。

平成七年から三年計画で内子町が施設整備を行い、農産物の産直施設「からり市場」、レストラン、農産加工場（パン・ハム工房）の三つの施設と、その事業を支える「農業情報センター」があります。

からり市場では、平成八年の箱物完成に向けて、六年から農業者自ら運営する組織をつくって実験事業を開始し、もう六年目に入っています。みんなで決めたルールは「自分で作った農産物に、自らが値段を付けて、自分たちで販売していく」というもの。

今では、農産物の直販が一般流通の中で地位を確立しつつありますが、当時は「売れなかったらどうするか…」その心配ばかりをしておりました。

行政が地域農業に具体的な支援の必要を迫られているのは、全国的な傾向だと思いますが、当町でも農業を取り巻く環境が「中山間地」のモデルのような地域ですから、抱えている問題は過疎、高齢化、後継者、福祉、教育とすべて網羅しております。認識は、当町は「農業のまちである」というところから始まっています。

町の振興はやはり農業振興が基本です。葉たばこの産地でもあり、富有柿、ぶどう、桃、梨の産地でもあります。規模拡大、機械化、集約化の方向は、後継者がいる農家に限られてきます。

JAの共同販売路線に乗れない、半ば小規模兼業農家、年金プラス自給農家は農業に上昇の希望を抱いていません。

その中での農業活性化策の一つに、必然的に、キュウリ一本、大根一本から販売できる場所の整備の必要があったわけです。体に無理をしない程度に作った菜園の農作物を、換金して所得につなげていく、そして自分で直接消費者に届ける喜びを生き甲斐とする。

平成六年度当初、七十数名だった会員が、今では二百九十名に増えています。

ファックスシステムの導入

今年度から若い会員が持ち込みが困難な農家の商品を家まで取りに行って集荷するシステムを実験的に始めています。農業に定年はありません。車やオートバイで、からり市場に持ち込むことが困難な人も、お互いのネットワークでカバーしていこうというのがねらいです。

各農家に配置されたファックスシステム

その時に威力を発揮しているのが、ファックスシステムです。家に居ながらにして、からり市場の販売がわかるよう簡単なボタン操作で、市場のPOSに参加できるわけです。出荷した物がいったいどんな風に売れていくのか。もしかしたら、朝出荷して、たったの一時間で完売しているかもしれません。午後からも再出荷することが出来るわけです。実際に一日に二度、三度と出荷している農家もおります。

からり市場

朝採りの新鮮さに加えて午後からの来客にも、「からりにはいつも新鮮な物がある」というイメージにもつながってきます。自分で販売するということは、消費者からの生の情報を頂けることになり、それが生産にまで跳ね返ってきます。

農業情報センターの今後

安全なものを願う声には、無農薬で応え、新鮮なものを願う声には、朝採りで応えます。今までの流通の中で便宜的に出来上がったシステムの見直しが、これから必要になってきます。本当においしい物は、畑で完熟間近になった物です。

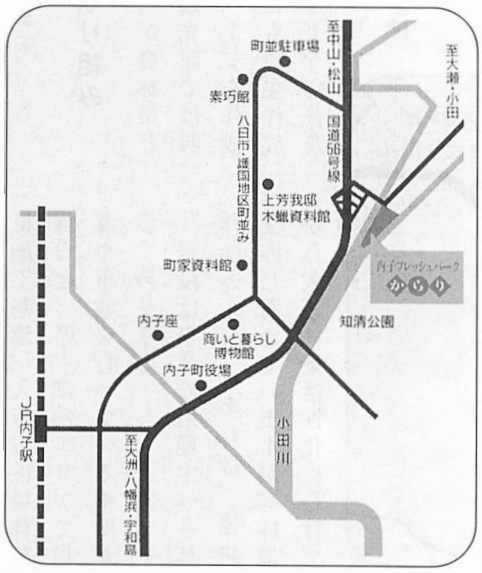
でも鮮度を保持しながら流通に乗せるのは難しいわけです。安全な物を作ろうとすれば、虫のかじったものが混じるわけです。完熟を「日持ちがしない」といい、消毒防除をしない為、形が画一でない物を「使い勝手が悪い」という消費者の声に対して、安全なモノを作るとはこうなんだという情報を自ら発信していく必要があるわけです。

自然環境に対する関心がたかまりつつある今日、その声に耳を傾ける消費者が増えています。その農家の声の発信の一端を情報センターが担っています。農家とからりのインターネットの先に消費者とのインターネットがあります。

少しずつインターネットに参加する若い〝からり〟の会員が増えています。これらの新しいネットワークと市場での素朴な消費者とのふれあいが融合して、からりのイメージを形成しています。

「頼めばちゃんと品物を確保してくれる」「電話一本で去年と同じおいしい旬の果物が手に入る」「誕生日前には〝からり〟から、おめでとうの葉書が来た」無機的なソフトの操作が有機を産んでくれます。「内子ファンクラブ」会員もインターネットでお便りをくれる時代になりました。

素朴な人と人のつながりを如何にしてこのハイテクネットワークと繋げていくか・・内子の農家が元気で居る限り、この課題は問いかけられることでしょう。



★内子町ホームページ
http://www.islands.ne.jp/uchiko

★森本純一さんホームページ
http://www.dokidokii.ne.jp/home2/ufufu

特集 "時代が変わる 何かが芽生える"

—情報が拓く新たなまちづくり—

地域づくりのための情報ネットワーク

久万町商工観光課
（久万町）　宇都宮　栄一

地域づくりと情報化

現在、インターネットを中心とするマルチメディア社会が到来し、この情報通信のネットワークをいかに利用でき、地域づくりに生かせるかどうか、期待と不安が高まっています。取り組み次第によって随分と情報の地域間格差がでてくるといわれています。また、地域の特性を生かした情報化を進めることができるかどうかが、地方での情報化が成功するかどうかのキーポイントであるともいわれています。

また、地域の情報通信の基盤整備や、情報サービスを提供することも大切なことですが、情報を上手に使いこなす仕組みづくりや、普及事業なども、情報化推進にあたっては大切なことになるでしょう。

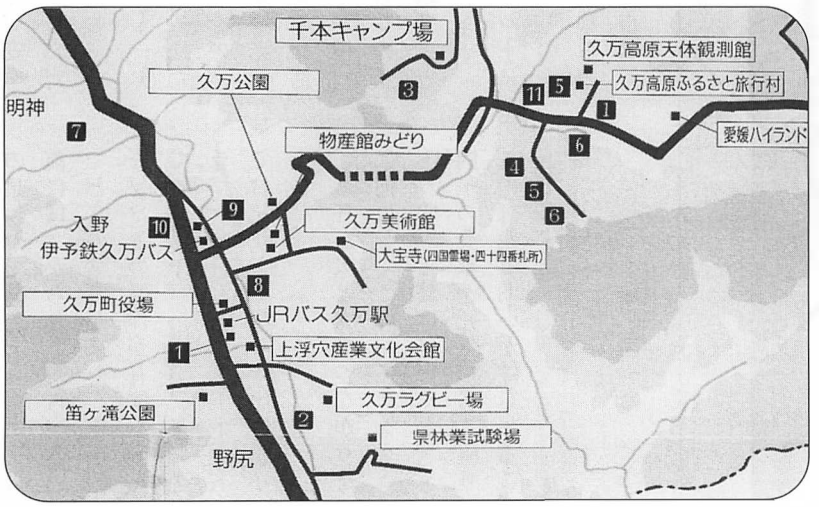
地域づくりのための連携活動を行っていく上において、今後情報化は大きな役割を果たすものとして期待をしています。地域産業活性化の情報ネットワークは特に特色ある地域づくりを支援することができることと考えます。

久万町での取り組み

久万町は主産業が農林業と観光事業です。観光面では四年前からホームページを作成し、民間の会員にも自主作成、自主管理ができるように普及事業を行っており、少しずつ効果を上げてきました。

今年度は、林業情報ネットワーク研究会を発足させ、「久万林業の情報発信」と「林業関係機関の情報ネットワーク網の構築」の実用化に向けて研究協議を行っております。幸いなことに、久万町には愛媛県林業試験場や県出張所林業課、中予山岳流域林業活性化センター、株式会社いぶき、久万広域森林組合、久万広域森林組合大規模木材加工基地、久万町役場林業課など、県、郡内エリアで指導や事業を行っている機関が多くあります。

普段は事業の処理すべき具体的な事柄があれば、連絡、交渉しあっていますが、日常から久万林業活性化にむけて



の、情報の公開や、コミュニケーションの場が少ないのが現状です。行政や組合、企業の垣根を越えて縦横自由に情報のネットワークがスムーズにとることができれば、久万林業の活性化に繋がると考えてます。

人あっての情報

情報ネットワークを進める前にこのごろ痛感することは、まずはお互いに人間を知り合うこと、信頼しあえることです。いくら情報ネットワークの基盤整備が進んでも、情報は人が発信したり、受け取ったりするものです。地域エリア内でのイントラでは有効に情報を共有したり、入手、発信するためには、普段からのコミュニティづくりが最も大切であると思います。

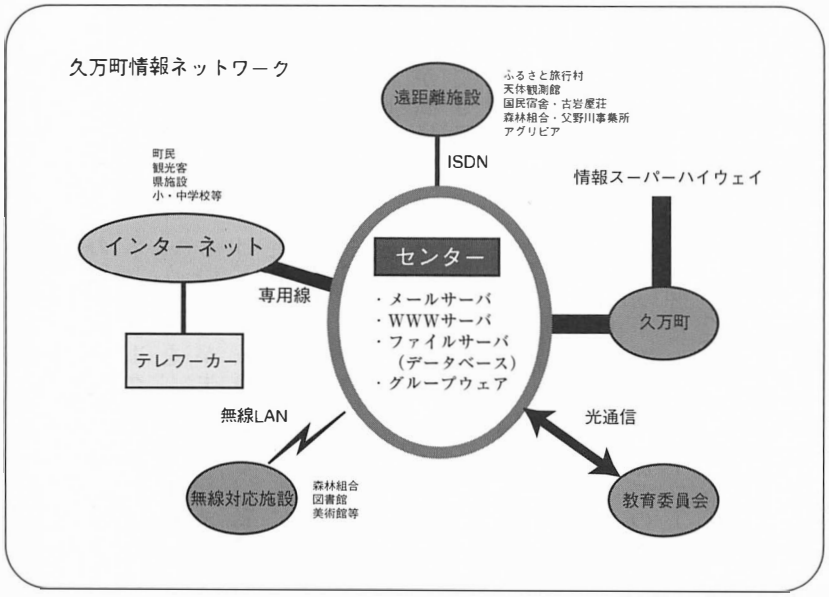
これからは「人、モノ、金」のキーワードではなく、「人、人、人」そのネットワークで地域づくりが動く時代だと思います。

これからの取り組み

現在久万町では、郵政省四国情報通信監理局の指導で、無線を利用したイントラネットの実験を行っています。電話回線を利用せずに無線でサーバーの機材までネットワークが繋がるもので、普及が進めば、地域のイントラネットや、各家庭への情報ネットワーク網の整備が加速するものと期待しています。

また、テレワーク事業の研究検討も行っており、地域の情報通信が進むに従って、情報公開や、データベースの作成の仕事が多くなってきます。その仕事を役所の職員を増員したり、企業の委託事業として行うのではなく、民間の個人の方の雇用としてできないだろうかと考えています。情報通信に伴う仕事の確保や、テレワーカーの育成などこれからの課題も多く山積していますが、一つの地域活性化策になることを期待して少しずつできることから検討を進めています。

情報通信は地域のイントラネットだけでは、閉鎖された空間で本当の意味でのネットワーク社会の実現とはいきません。情報化を進めるに当たっては、自治体を越えた広域での取り組みや、自治体を越えて世界の誰とでも、いつでも、どこでもネットワークができる環境が必要です。近隣市町村での共同の研究事業や、情報通信の環境整備も今後の課題となってくるでしょう。また、追求するテーマが同じであれば、地理的、時間的距離は関係なくネットワークが生かされることになるでしょう。分・進・秒・歩で進歩する情報通信機器を生かして新たなる情報化が拓くまちづくりに生かしていきたいものです。



★久万町ホームページ
http://www.netwave.or.jp/~kuma/

まちづくりとネットワークの出会い

松山大学経営学部教授
墨岡　学

先日、久万町で開かれた「地域づくりとインターネットの活用」研究フォーラムで愛媛の各市町村のホームページ作成担当者やこれからそのホームページ作りにたずさわることになる予定の人々とお会いして現場の生の声を聞く機会があった。

フロアトーキングの場で出席者から出た率直な意見をホームページの立上げ度で分類すると、①これからホームページを立ち上げるため役所内部の体制作りをしながら業者とシステム構築を検討中、②ホームページは既にあるが、その更新方法についての体制を検討中、③時期的に早くからホームページをつくり、更新も頻繁でその内容も充実して、評判はいいが、そろそろ担当者が替わりそうなので新担当者は評判の良さを維持するために相当の負担を覚悟しなければならない、などであった。

愛媛の各市町村のまちづくりとインターネットについては、どこも大きく分けてこの三つの段階のどこかに位置付けられるのではないだろうか。新しくホームページをつくるところが直面する難しさは技術的な問題よりも、ホームページが社会的に認知されたその結果として自治体のホームページが果たすべき役割が重要になってきたために、気軽にコンピュータとネットワークを得意とする職員が独自のものをつくることができにくくなってきたことだろう。「ホームページに掲載する文書の決裁を上司に求める方法」などについても質問が出され、そのためのシステムについても議論がなされた。どこまで情報公開をするか？ホームページ、もっと広い意味でインターネットを活用した住民への情報提供と住民からの意見収集や情報交換や議論の場を提供する仕組みをつくることは、市町村のまちづくりにおいて二〇〇〇年以降のデジタル時代で重要な課題となりつつある。

ここで意識して注意する必要があることはデジタル時代の「人間の存在」である。何のためのデジタル化、情報化、ネットワーク化であるのかということを、それを実行するものたちが失念してしまっては、本末転倒となる。私達の生活や文化をより豊かにするためのデジタル時代であるから、あまりの効率化や合理化を急いでは逆に私達を人間同士の生の声が聞こえない世界に閉じ込めてしまう危険性がある。オーウェルが警告した『一九八四年』のような世界には誰も住みたくはない。

岩城村のホームページ「きゃもぉーん」は参加者の間で人気者だった。キーワードの「青いレモンの島」が全体に効いているのがよかったのでしょうか。やはりホームページの見かけ、内容に人間味を感じさせるものがよいと思われる。

愛媛のホームページは三段階に分かれていると書いたのだが、これからスタートさせる第一段階のところでは、ぜひその地域の人間のキャラクターを感じさせるものを制作していただきたい。特産物や

◀岩城村のホームページ

そこにある自然にしても人間が生活しているから存在するものだから。

久万町での会でインターネットが普及する四、五年前からあった大分市と松山市のパソコン通信によるまちづくりの状況を話した。どちらもスタートしたのは時間的にそれほど差はなかった。ただ、大分市のものがインターネットの急速な拡大の波にうまく乗ったのに、松山市ではその波に乗るための環境がなかったことであった。現在では大分県の(財)ハイパーネットワーク社会研究所が中心となり別府湾会議が定期的に開催され有力なホームページサイトの関係者も集まっている。

偶然にも久万町での研究会が別府湾会議と同じ日であったので、この話題を提供したが、会場から来年は連携をとりたいとの声もあった。情報スーパーハイウェイのような情報交換のインフラが整備されつつある愛媛だから、この可能性も夢ではない。

さらに偶然というか、もしかすると必然なのかもしれないが、その一週間後に愛媛のパソコン通信のひとつであった「アクセス愛媛」のクロージング・パーティーが開かれた。そこで見たのは、役目を終え次の時代のために形を変えるネットワークによる交流会の姿であった。

主催者は「パソコン通信」から「インターネットのポータルサイト」への移行を匂わせていた。参加者は仲間とのネットでの出会いを惜しんでいる人達が大勢であった。

ポータルサイトとは、聞き慣れない言葉だと思う人も多いかもしれないが、ヤフーのようにホームページの検索や独自の情報サービス提供を行っているホームページのことである。

いま時代はホームページによってデータベースを提供する流れに変化しつつある。人々がネットワークを通して得たい情報は、派手なデザインのホームページではなく、その内容である。本当に役立つデータベースからの知識を必要なときにいつでも引き出すことができるページである。

これからのまちづくりのためのホームページには、地域の充実したデータベースは欠かすことができないだろう。パソコン通信との関係では、このクロージング・パーティーに参加してあらためてパソコン通信の「顔の見えるネットワーク」が地域に根ざした地域づくりのために交流の場として機能していることを強く感じた。

参加者の中の看護婦さんはボランティアで介護の問題を話し合うためのパソコン通信のためのホスト局を運営しており、自分の果たしている役目をしっかりと認識しローカルなネットワークの存在価値を強調していた。顔の見える近さにいることローカルであるために匿名の書きこみが少なく町内の回覧版のようなパソコン通信も捨てがたいと感じた。

地域づくりにとってのインターネットという視点で大切なのは、地域の参加している人々を輝かすことであり、ホームページやパソコンだけを磨いてもそれは意味をなさない。そのために、デジタル時代の便利な道具としてインターネットやコンピュータを活用したい。これはインターネットを軽視するものではなく、インターネットが出発したときの精神は「インターネットに参加するものはそれぞれ自分のできる範囲でできる限りの努力をする(Do the best effort)」ものであったことを、地域づくりに参加するものは忘れてはならない。

★墨岡　学教授のホームページ
http://www.co.matsuyama-u.ac.jp/~sumioka/

キラリ光るまち

地域づくりと情報化

～「電脳由村」の挑戦～

富山県山田村　助役　小西　源清

情報化のきっかけ

山田村は、富山県の西南部に位置し、県都富山市から道程で二十二㎞、ＪＲ富山駅からバスで五十分、標高一〇〇ｍから一、〇〇〇ｍの山峡にある過疎の村である。

人口：二、〇〇〇人
戸数：約四四〇戸
高齢化率：約二四％
産業：農業及び観光関連のサービス業

山田村の情報化は、平成七年四月、中学校から「授業でパソコン通信に取り組みたい」との要望が出され、ＮＴＴ富山支店に相談したところ「今やパソコン通信よりもインターネットの時代ですよ」というアドバイスをいただいて、ＩＳＤＮ回線を村まで引いたことから全てが始まった。

山田村がインターネットにホームページを開設したのは、その年の八月八日であるが、ホームページは職員の手作りでスタートさせた。この八月中のアクセスが六、六七七件とインターネットの情報力に驚いたところである。

次のきっかけは、平成七年度補正予算で、国土庁の地域情報交流拠点施設整備モデル事業（以下「情報モデル事業」という。）に採択されたことによる。

情報モデル事業の取り組み

二十一世紀が高度情報化社会と言われる中で、高齢者が多い山田村で、高齢者に使ってもらう為には、何ができるだろうかと考えた結果、テレビ電話での人情的なコミュニケーションづくりを第一に、インターネットや電子メールの利用と、パソコンそのものが活用できるソフト込みのハードとなった。

そして平成八年七月から希望する約三二五戸（全戸四四〇戸のおよそ七割）にテレビ電話機能付きのパソコンを貸与した。

既存の公民館に併設して新築した情報センターにインターネットプロバイダー機能のほか個人では求め難い情報機器を設置し、村民が自由にさまざまな学習や創作活動のほか、情報の受発信を通し個性の表現など能動的な情報感度の向上を図っている。

さらに農林水産省の高齢者生きがい発揮促進事業等により、全戸の九割に当たる三九〇戸にパソコンを配置した。

山田村の情報化事業は、都会との情報の格差や地域内の情報格差を解消することによって、地域の活性化を図ることを目的としている。

インターネット等の最新技術は都市部では自然に浸透するが、山村では誰かが動かなければ何も変化しない。そこで村がきっかけ作りやレール作りを積極的に進めてきたところである。

〈情報モデル事業の概要〉
・通信開始：平成９年１月から
・インターネットの接続：平成９年２月から
・事業費：３億６千万円

事業費の内訳
情報センター建設費‥‥１５９,０００千円
情報センター機器費‥‥‥７７,１００千円
情報端末機‥‥‥‥‥‥１２３,９００千円

財源の内訳
国の補助金‥‥‥‥‥‥‥９９,１６６千円
県の補助金‥‥‥‥‥‥‥２９,０００千円
一般財源‥‥‥‥‥‥‥‥１２,８３４千円
村債‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥２１９,０００千円

情報化による山田村の変化

第一に、村の知名度が上がった。マスコミのおかげで新聞、ＴＶ、雑誌で一躍有名になった。

第二に、インターネットのホームページを見て実際に村に訪れる人やボランティアなど、ネットワーク上に止まらず交流が拡がっている。

第三に、「受け身がちの住民」が、マスコミや外部とのかかわりの中で積極的に意見を言ったり発言する場面が見られるようになった。

第四に、住民と村役場との距離も短くなっている。特に若者の村に対する思いが変化しつつある。

第五に、パソコンのおかげで祖父母と孫との会話や村の中での住民同士の会話が非常に良くなっている。

今後の課題と発展可能性

地域の情報化において、一時的に機器導入・システムの構築は容易であるが利活用や維持管理は極めて困難な状況にある。地域情報化推進の決め手は、如何に利用度をあげ、システムを管理するかに係っている。

誰でも簡単に操作できる手軽さと情報機器等の維持管理を自らができるシステムが必要である。

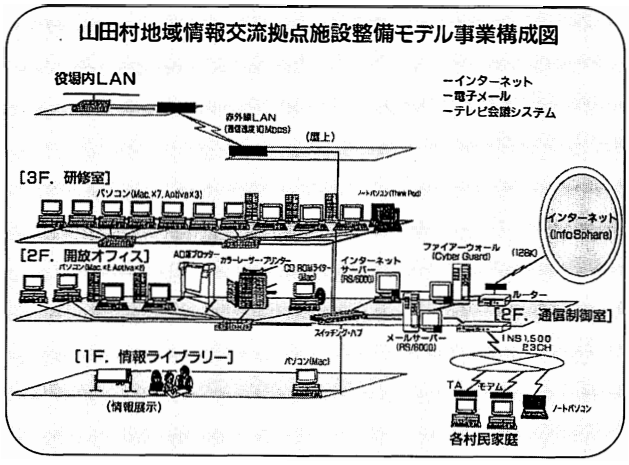
また、行政の情報化は、住民と行政が一体的なもので、しかも住民の福祉に係わるものでなくてはならない。住民の健康管理や高齢者・独居者・ねたきり者の生活支援及び遠隔診療等の保健、医療、福祉であり、さらには防災対策情報であろう。

情報のインフラ整備、とくに通信ネットごときは都市部が先行され地方が後回しになるのは必然的である。全ての住民が、高度情報通信社会の便益を享受できる仕組みの構築が行政に課せられた重要な課題であり、責務であろうと考える。

そこで赤外線を利用した無線も視野に入れ、山田村の地形に応じたネットワークの構築を検討しており、さらには広域ネットワークへと繋ぎたいと思っている。

むすび

山田村では、平成七年から情報環境を整備し、人々が快適に暮らし「新たな文化の創造と新しい村づくり」に役立てたいと取り組んできた。村民の「だれもが、どこでも、いつでも、自由に情報に取り組める村」を目指し、誰もが使える「ネットワークの構築」や「システムの開発」及び「情報システム管理」の整備とともに、ゆっくりと着実に村民全員が参加できる形で「学ぶ、使う、活かす」を進め「電脳村」の位置づけを確実なものにしたいと考えている。



★山田村ホームページ
http://www.vill.yamada.toyama.jp/

「宝物は島の仲間たち」

岩城村
島本　計治

イベントをやると仲間が増える、人脈が広がる、これができない人は情熱不足。

役所に入って二十年、一般企業からの転職で、電子関係の専門分野とは全く畑違いの仕事であったが後悔はない。むしろ自己実現のできやすい島の生活をこよなく楽しんでいる。（楽しめない分野も多々あるが・・）島で暮らしたい。暮らせる島にしたい、この思いは誰にも負けない。だからというわけではないがパチンコはやらない。

「役所は十三年目にはじめて自分の仕事ができ始める」（「浪漫亭」　鈴木繁夫）この言葉が未だに心に残る。偶然であるが浪漫亭研修での出会いが役所に入ってちょうど十三年目であった。あの頃鈴木さんによく叱られたことを思い出す。それを機会に「まるごと体験ツアー」（お見合いツアー）を四回開催、庁内ＯＡ化（小規模ＬＡＮ）も先陣を切って手がけ、そして今は「大空散歩大会」、レモンのゼロエミッションを目指した特産品開発等の仕事である。

七～八年前から仲間たちとともにパラグライダーの力を借りて「鳥」になる作業を始めた。でも鳥になるには技術の習得とエリアを開発する必要があり、誰もしてくれないので自分たちで汗をかく。手も汚れる。お陰様で今では重機の扱いにも慣れた。時には足引っ張りの罵声を浴びることもある。それもいい試練。結局途中でやめない、あきらめなかったのがよかった。

最初に全国版のパラグライダー競技大会を開いたのが、平成七年。昨年十一月十三日に第五回の大会を開催した。今回は絶好のコンディションに恵まれ、千葉から長崎まで全国から集まったフライヤー達四十人程が、眼下に瀬戸内海の島々の大パノラマを見ながら、ゆったりと空の散歩を楽しんでいた。結構なじみの顔も増えてきて、そのおなじみさんが友達を誘ってのパターンも多いようであった。

そして夜は表彰式の後、恒例の「ふれあいパーティー」。地元スタッフが集めたタイ、イカ、穴子、さざえ、牡蠣など「日本一の食材」を刺し身、焼き物、包み焼、ご飯もの、イモ炊き、ピザにラストが焼き芋。スタッフには元板前さんもおり多彩な料理を自作できるのである。

この作業をはじめた当初は、危険なスポーツというイメージから島の人達には、ややとっつきにくい感もあったが、いろんなメディアも取り上げてくれ、今では市民権を得てきた。人が来ればそれなりに経済効果も生まれてくるものであり、地域振興の面でも一役を担いだした。

私自身も休日には地元の空域を存分に楽しんでいるフライヤーの一人である。全国にいっぱいパラ友達もできてきたので、今度は島の仲間達と一緒に遠くへ遠征しようと胸をはせている。

最後に「島は空も海もあって結構楽しいでー、あんたもいっぺん来てみいや。」

瀬戸内の大空に向かってテイクオフ

★岩城村ホームページ
http://www.islands.ne.jp/iwagi/

住めば都―私の生きる道―

新宮村
藤川　美紀

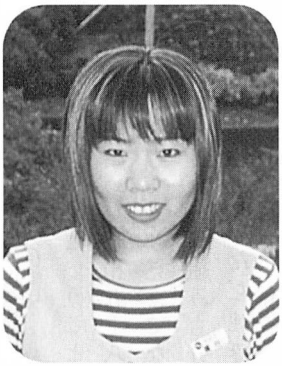
みなさん、はじめまして。私が住んでいる新宮村は、愛媛の東の端、四国のまん中にあり、今年「霧の森・霧の高原」という観光施設がオープンした村です。

私は短大を卒業し、新宮村へ帰ってきて早四年が経とうとしています。音楽関係の仕事に就きたかった私が役場で事務をしているなんて、初めはかなり抵抗がありました。本当は、こんな田舎に帰ってくる予定じゃなかったのに…。でも、今は役場に勤める傍ら、村の子供達にピアノを教えています。

私は三歳の頃からピアノを習い始め、小学一年の時、ピアノの先生になりたいと思い始めたのを覚えています。今はまだ、生徒は少ないけれど、夢が叶い嬉しく思っています。

一月に初めて生徒の発表会を行うのですが、本業は役場職員のため、決めたレッスン日通りこなせていないのが悩みです。子供達には迷惑をかけてばかりだけれど、みんな発表会は成功させようね！と励ましてがんばっています。今は、焦りと緊張の毎日です。

私は子供達に、日常不可欠な音楽を、ピアノを通してもっと身近に感じてもらい、感性豊かに育ってほしいと思っています。



役場職員、ピアノ教師、そして私のもう一つの顔が青年団員です。村に帰ってくるや否や勧誘されたのですが、私は青年団というダサい名前のグループに所属するのが嫌で一年間入団を拒否し続けました。しかし、団長たっての勧誘と、イベントごとの打ち上げが楽しそうなのに引かれ、とうとう入団を決意したのです。

新宮村青年団は現在、男性十名、女性二名の計十二名です。平均年齢二十四歳で他の市町村の青年団に比べると若い団だと思います。主な活動は、村内清掃、六月末のあじさいまつり出店、八月盆踊り、十一月三日産業文化祭出店、そして唯一青年団だけのクリスマスイベントです。

十二月二十四日、新宮村の子供達の家にサンタクロースがやってくるのです。私たちが、サンタやトナカイ、ピエロ、さるなどに扮しているのですが、本物のサンタが来たと思って泣き出してしまう子や、今年も来てくれたんだと大喜びの子がいて、私達も本当にサンタになった気分で子供達に感動を与えられることができ、毎年楽しいクリスマスを送っています。

結局、私はこの三年間で青年団に染まってしまい、あんなに嫌だった青年団という名前も、住めば都といった感じでしょうか。慣れてしまったようです。でもやっぱり変えれるものならもっとかわいいのにしたい。そうすれば団員も増えると思うんだけど。

それにしても、新宮村に帰ってきてこんなに村民の人達と関わる仕事に就くなんて思ってもいませんでした。こんな田舎だけれど私は新宮村で働けることを今では嬉しく思います。今ではどこにいても情報発信する手段はいくらでもあるし、インターネットで世界ともつながるじゃないですか。夢は広がりますよね。豊かな自然に囲まれて、これからも子供達と村民のみなさんとの交流の輪を広げていきたいと思います。

★新宮村ホームページ
http://www.islands.ne.jp/shingu/

風おこしのちかい
「まちづくりの原点にかえって」

えひめ地域づくり研究会議運営委員
（五十崎町）　河畠　登紀

村おこし、まちおこし、地域づくり等々言い尽くされたことば、もうこういうことばから新鮮な空気は感じ取れなくなってきているかも知れません。でも始まりもないけれど終わりのないことばです。

私が地域づくりということばを認識し始めた昭和五十八年頃、周りもあまり見えてなかったし、社会の仕組みも分からなかったし、ただ純粋に？仲間と動き回っていたことを思い出します。ここ十六、七年時が流れ、何か見えてきたかよくは分からないけど、仲間と一緒に何かをやり続けて行くような気がします。初めのころ何か特別な事のような感じがしていたのを思い出します。

でも、特別な技術がいるとか、特別な人がすることではないのです。強いて何か条件があるとしたら仲間が三人いればいいと思います。そして、楽しいこと、しんどいけど楽しいことも重要な条件だと思います。コトおこしの材料は身近に、足元にあります。自分の興味のあるコトを少し深く見つめてみると、動くキッカケが見つかるのではないでしょうか。そして、自らが動くこと、動くと何かに当たります。人間は体験がやはりエネルギーになるのでしょう。私の経験でそう思います。すべて体験できるわけではありませんが、まずは自分を動かすことでした。

＊　＊　＊

ここ何年か「えひめ地域づくり研究会議」でいろいろ勉強させてもらっていますが、どこにも「おらがむら、おらがまち」と想っている方々がいらっしゃいます。よそ者がすごいと感動することも、そこで暮らしておられる方にとっては普通のこと、毎日の暮らしの中に入り込んでいることがあります。一方で文化遺産ととらえることでも、そこで暮らしている方々にとっては生まれたときからそこにあって決して特別なものではないこともあります。

地域づくり研究会議では今年度各地でミニフォーラムを実施しています。各地で頑張っている人々と会って特色のある地域を見学したりと、応援団になれば少しはいいかなと思いつつ参加をしています。

先日、三崎町の名取集落でのミニフォーラムでも、石垣のすばらしさ等々を見せて戴きましたが、その地域の長い年月をかけて創出された風景であり、決して人の暮らしと離れてはいないことを実感しました。だからこそ、いわゆる過疎化、高齢化の現状をどうするかが大きな課題となっ

三崎町名取地区でのミニフォーラム

ているわけだけれど。よそ者が簡単にすばらしい風景だから残して下さいとか言うのはあまりにも無責任だと思うけれど、そこに「おらがむら」と想っておられる方がいらっしゃるのがうれしいですね。やはり「人」であると思う。

また、双海町東越地区でのミニフォーラムでは、真珠・めだか・EM菌・炭を切り口として環境について話し合いました。やはりそこには地域を想う人がおられました。そして一緒に話し合い共に行動する仲間がいらっしゃいました。

双海町「鱗寿庵（こうじゅあん）」でのミニフォーラム

ただ、風景や情熱だけでは生活が成り立たないのも現実です。そこに経済活動を組み込むことも重要な条件だということを今更ながら考えています。

棚田についても日本人の原風景とか農水省が「日本の棚田百選」に認定するとか棚田が国土保全や生態系の維持などに果たしている役割を理解してもらうこと等を狙いにしていると思われますが、だからそこで人力で耕作して米を作ってほしいとお願いするだけではもう限界がきているのではないでしょうか。それで生活しろとは到底言えない状況ではないでしょうか。

＊　＊　＊

私の住んでいる五十崎町でも高齢化に向けて、また商店街の再活性化に向け、どうすれば住み慣れた地域で安心して安全に生きがいをもって暮らしていけるかをテーマに話し合いを続けているところです。福祉・景観・環境・教育・医療・商業機能・新産業・サービス等々いろんな切り口から話し合っています。こうあればいいということは殆ど出ているのですが、誰が具現化するのかとなるとこれまたなかなか大変なことです。

最も身近で自分のこととして考えなければいけないことを、仲間と一緒に考え行動を起こすことができれば幸せなことではないでしょうか。すぐ答えが出ることもないし、答えが一つだけでもないし、これでもういいということもないけれど地域が見えてきます。これからが踏ん張りどころなのですが…。

五十崎町ミニ四国の途中で見られる棚田

えひめ地域づくり研究会議では毎年年次フォーラムを開催していますが，99年度は「いつまでも安心して暮らせるまちづくりとは」をテーマに話し合う計画になっています。まちづくりの原点として自分のこととして一緒に話し合いませんか。何か見えてくるかも知れません。

★五十崎町ホームページ
http://www.shikoku.ne.jp/bigkite/

―研究員レポート―

まちづくりの先進地は今

～大分県大山町・湯布院町を訪れて～

研究員　沖田　敏広

西瀬戸まちづくり・むらおこし交流推進事業で、十一月二十五～二十七日の三日間、大分県大山町、湯布院町を県内のまちづくり関係者十名と共に視察・研修に訪れた。

NPC運動から都市との交流・連携を目指す大山町

大山町は、NPC運動を柱として昭和三十年代から町づくりに取り組み「梅・栗植えてハワイに行こう」というキャッチフレーズはあまりに有名なところ。

このNPC運動は、梅・栗による「所得向上」、海外研修などを通じての「人づくり」、住み良い「環境づくり」と三次にわたり運動を展開してきた。

しかし、九州一の産地となった梅も、青果販売が中心で、エノキや菌床シイタケの導入により、天候に左右されない安定収入が確保されると、梅の町も色あせてきた時期があった。

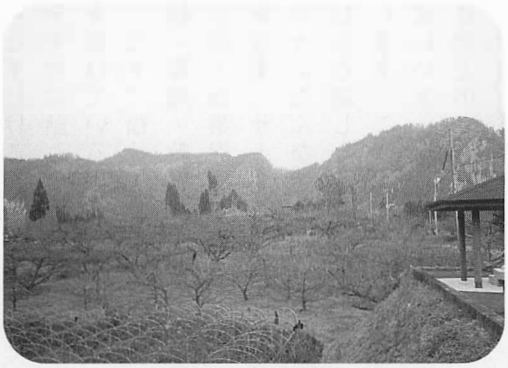
その救世主となったのが、アイデア公募がきっかけの「梅干しの主張全国コンクール」で、「たが梅干しが、されど梅干し」となり自家製梅干しが売れるようになって、農家の意識も変わり改植も進んできたということである。

また、無販売農家を無くそうと始まった「木の花ガルテン」は、福岡、大分にも支店を持ち毎朝取れたての野菜が配送され、高齢者や主婦等の生きがいや生産意欲の向上に結びついている。そして販売する農産物に生産者名が印字されていることから、信頼と交流に繋がっているようである。

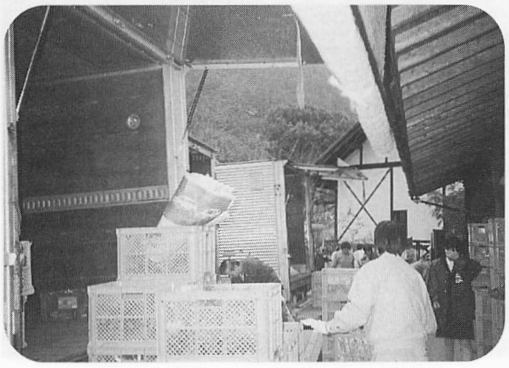
一方、大山町では情報化にも先進的に取り組み、昭和六十二年にOYT（大山有線テレビ）が開局され、平成八年度には「マルチメディア対応情報システム」が導入され、一方向だった情報の流れが双方向になり、リクエストチャンネルをはじめ、パソコンネットなど「放送」から「通信」へと機能が向上している。

このような情報化への取り組みとともに、福岡市に平成十年にオープンした「おおやま生活領事館」は、アンテナショップという形態が多い状況の中、あえて交流施設と位置づけている。

この施設の安田領事は、元NHK職員という経験を生かし、メディアを上手く使って、



2万本の梅林が広がる大久保台



「木の花ガルデン」で各支店への出荷作業

大山町の情報発信をされており、都市住民の農村体験交流や計画中の総合学習のための教育ファームなどは、この施設あってという感じがした。

また、NPC運動の発祥の地「大久保台」では、温泉を活用した「やすらぎの里」の整備が計画され、さらに企業と提携して梅酒工場の予定もある。

「大山には何もないでしょう。でも元気な人間はいっぱいいますよ。」と始まり、色々と話していただいた役場の緒方課長さんからも、大山町の今後は、交流や連携を重視したまちづくりを目指しているのではないかという気がした。

最も住みやすい町こそ 勝れた観光地・湯布院町

二日目は自然環境を生かした温泉保養地として名高い湯布院町を訪れた。観光客は町の人口一万二千人に対し、年間四百万人を数え、町の人口と同数がほぼ毎日出入りしているということになる。

ただ、ここに至る過程には、大型ホテルやリゾート施設などの開発の波にも見舞われたが、住民主体の運動でこれを排除して落ち着いた暮らしを守ってきた歴史がある。

このことは、町並みの裏に田園風景が広がり、由布岳の景観を妨げていないところからも「最も住みやすい町こそ勝れた観光地」というのが良く現れている。

レストラン&ギャラリー「南の風」で田井修二さんの話を聞く

お話を伺った湯布院のまちづくりに関わってきた田井修二さんにしても、「ゆふいん音楽祭」が縁で十五年前から移り住むようになったそうであるが、最初は地元で採れたトマトを観光客に食べてもらおうというところから出発し、地元の人も買ってもらえるような輸入雑貨を手がけたりと、地元の協力を得て楽しみながら活動されてきた様子。

田井さんの話からも、また公募により観光総合事務所の事務局長となった米田さんにしても、よそ者は受け入れないというのではなく、自由に住んで活躍できる場、助け合う環境があり、このように人を大切にする姿勢が、人を引きつける湯布院のまちづくりに繋がっているような気がした。

おわりに

まちづくりの先進地として歩み続ける大山、湯布院は、やはり先を見据えて着実な動きを見せていると感じた。そして次代を担う人がちゃんと育っていると思った。

地域にふさわしいまちづくりのため、表現が適当かどうか分からないが、田舎の良さを生かして町を活性化してきたこの二つの町を見てきて、まちづくりの可能性と魅力を感じた研修であった。

由布岳をバックに

★大山町ホームページ
http://www.town.oyama.oita.jp/

★湯布院町ホームページ
http://www.coara.or.jp/~yufuin96/

まちセン事業レポート '99秋

～初心忘るべからず～

研究員　檜垣　明宏

11/18～19「地域づくりとインターネットの活用」研究フォーラム　in 久万町

平成十一年八月、久万町テレワーク準備室の方々にお手伝いいただき、当センターのホームページ（HP）を開設したところですが、HPを管理運営していく上で、市町村担当者との間でネットワークづくりの場が必要ではないかと思い、講師に松山大学の墨岡学先生、またアドバイザーとして㈱デジタル・トゥワードの大富仁紫さんにお願いし研究フォーラムを開催したところ、県下各地から四〇名近くの参加がありました。

墨岡先生の基調講演では、まずインターネットの歴史や背景、先生たちが繰り広げている「子規俳句サロン」についてふれられた後、先生のHP内に作られたレジュメをプロジェクターで映し、「HPで地域づくり」「デジタル時代の人間づくり」「メーリングリストによる地域ネットワークの形成」「情報デザインの考え方」「情報建築家への道」などの切り口から、いくつかのHPを例に挙げて、地域づくりとインターネットとの関わりについて話していただいた。

続いて大富さんにも加わっていただきフロアトーキングに移り、はじめに墨岡先生から、「現在の市町村のHPは町外に向けた情報が多いが、地域づくりを考える場合、町内に向けた情報も大切。そして何を誰に向けて情報発信するのかを改めて検討し、リピーターを増やすためにもリアルタイムで情報発信していかなければならない」とアドバイスがあった。

そして、参加者から「日常業務が忙しく、管理時間が不足している。またパソコン精通者が少ないため、一人にかかる負担が多く、HPの内容が偏ってしまう。」「HP作成を業者委託しているため、タイムリーな情報提供が出来にくい。」「利用（カウント）が進んでいない。」等の悩み・問題点が話され、それに対してアドバイザー・参加者から「職員の意識改革からはじめ、研修により一人一人が技術向上していかなければならない。」「組織内でのLANなどを整備し、運営チームをつくり多くの人がHP運営に係わる形が望ましい。」「一度に多くの人に情報を広めていくのは難しいので、まず地域内での情報交換（イントラネット等）を広めてから、町外に情報発信していった方が良い。」「情報弱者をなくすためにも、いつでもどこでも使える場所や機材を整備する必要がある。」などのアドバイスや提案があった。

二日目は、NTT西日本と富士通㈱にご協力いただき、HP作成講座とメーリングリスト作成講座に分かれて、実際にパソコンを触りながらの実技研修を行った。

終了後、まだまだ不安を抱えている方が多かったせいか、今後もこういう場を設けて欲しいとの声が多くあった。

研究フォーラムフロアトーキングの様子

12/3 地域づくり研究サロン

約半年間にわたり千以上のイベントを売り物に開催された「しまなみ海道，99」が終了したこともあり、もう一度「イベント」というものを見つめ直すにはいい時期ではないかと思い、「イベントによる地域活性化術」というテーマで、講師に地域活性化コンサルタントの松井渉先生、コーディネーターを双海町の若松進一課長にお願いして研究サロンを開催しました。

研究サロン「イベントによる地域活性化術」の様子

イベントに携わる様々な立場から三十数名の参加があり、まず「地域のイベント戦略」と題して松井先生に基調講演をしていただいた。

「今後、日本全体の人口が減少していくなかで、過疎地は先進地であり、日本中から注目されているのだから、先駆けて具体的な地域の目標設定をしてイベントを行い地域活性化をしていく必要がある」と指摘があり、人間の特性を利用したイベントの運営や最近のイベントの傾向など事例を交えながらイベントの基本要素を教えていただいた。

その後、サロントーキングが行われ、イベントの企画から継続までの様々な視点から悩みや質問があげられた。

それに対して松井先生から、「大きな組織では手の届かない地域ならではのローカルな部分にこそ勝つチャンスがある。いろんな切り口から地域の資源（人）を見直し、自分の地域は何を売り物にしていくのか考えていけば、世界中にでも名が知れるイベントをつくることができる。」「イベントをやるときは少しでも黒字を出していかないと継続しない。今後、NPO（法人格）の形にしていくことも考えていく必要がある。」などのアドバイスがあった。

若松さんからは「私の手がけているイベントは、地域の個性が見えることを心がけ、二十年で止めるという目標をたて、五年おきにスタッフ全員でイベントの見直しを行い、外部からの情報やアクションも加えながら、より輝かせ育てていっている。そうすることでスタッフの緊張感の継続、イベント内容の充実が図られている。」「イベント（地域づくり）は、人が輝かなければ意味がなく、〝自分たちはどうなのか〟ということを常に考えていなければならない。」といったアドバイスをいただいた。

白熱した質疑は、参加者の方にとっても今後の取り組みへのいいヒントになったのではと思います。

おわりに

今回の事業を通じて感じたことは、地域づくりには様々な手段があるが、もちろん実践も大切だが実践に移すまでの〝はじめの段階〟が大切だとつくづく感じました。はじめの段階には何のために何をするのかという意識統一から、目標設定、地域再発見、人材育成・ネットワーク形成などがあると思います。ここでしっかりとしたシステムを作り上げそのシステムを基に、時代の流れを敏感にキャッチしながら、ちゃんとしたプロセスを踏んでいかないと、どんな手段を使っても後々問題が生じるのだと思いました。

二〇〇〇年代が始まり、私も「初心」に帰って、自分を見つめ直したいと思います。

“MY TOWN”うぉっちんぐ

歩キ目デス&足ラテス

第十弾　　岡崎　直司

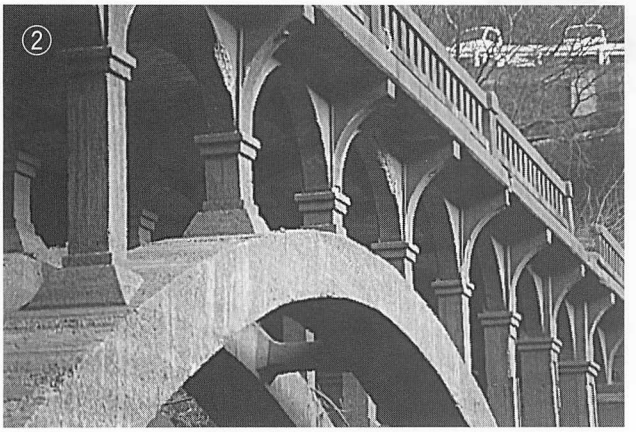
橋シリーズの二回目は、知る人ぞ知る橋の町から始めましょう。

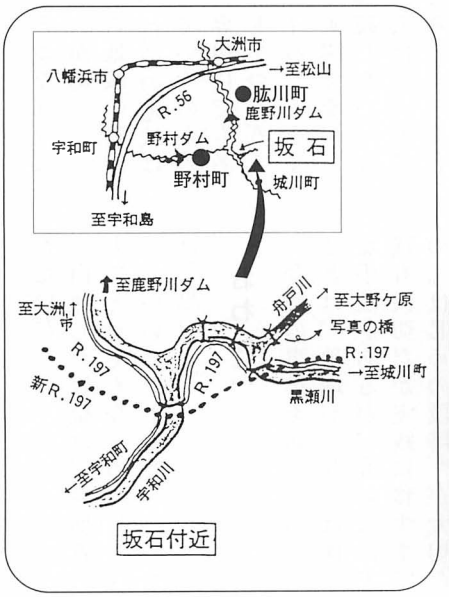
野村町坂石、この小さな町に、意外や意外多くの橋が架かっている。場所は、県下最大河川の肱川中流域。丁度、宇和盆地に端を発する宇和川と、城川町から流れる黒瀬川そして四国カルスト大野ヶ原辺りから下りくる舟戸川の三河川が合流する地点。この坂石は、かつての肱川が、南予山間地の大動脈として水運機能を持っていた頃、その起点集落として栄えた。大袈裟に言えば、アマゾンのマナウスに相当する。現に、その全長距離一〇三㎞と比べ、支流の多さによる流域面積は日本有数との事。

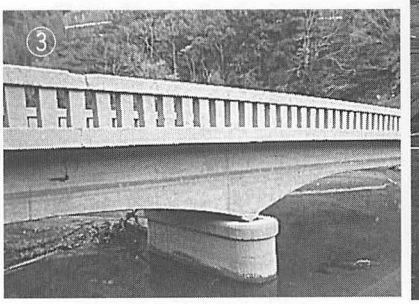
しかし、昭和三十五年、この町を根底から変える構造物が出現する。鹿野川ダムである。以後、下流域の洪水が大幅に減る。と同時に、それまでの坂石の集落は湖底に水没し、新たに付けられたダム湖沿いに全戸移転する。結果、当然の事としてそれぞれあった橋も新たに架け直されてゆく。勿論、筏流しの起点であった町の機能も完全に失われた。

写真①は湖底に沈んだ旧舟戸川橋と現在の舟戸橋である。写真②はコンクリート製ながらギリシャ建築のような美しいデザインを、川面から眺めた姿。何れも異常渇水時の撮影であるが、水面下に置いておくのは勿体ない上路式アーチの構成美である。

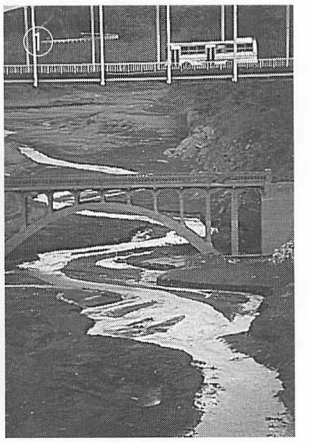
写真③は、宇和川方面に行った所に残るコンクリート製桁橋。この橋は通常完全に水没する







H11.1.22撮影
通常水面に沈んでいる橋



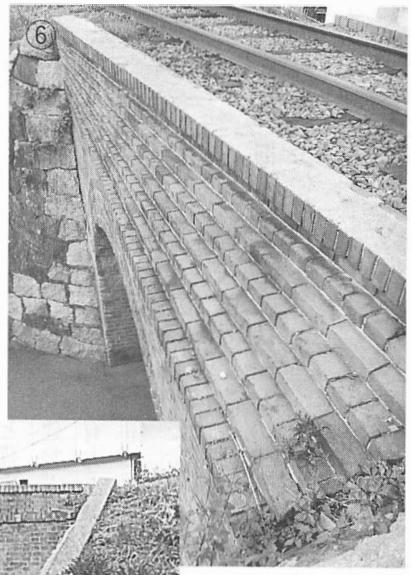
H11.1.22撮影
旧舟戸川橋と現舟戸橋

ので、余程でないと見られない。実は、この橋の真上に、現在はR一九七号線改良で完成した真新しい鉄骨製アーチ橋が架かっている。つまりは、旧坂石集落の時代の橋とダム出現時の橋、そして今回国道改良でバイパス的に新設された橋と、都合三世代の橋が見られるのが、この坂石なのである。県内はおろか、全国的にも珍しい橋の町である。

写真④は、宇和島市の穂積橋。この橋にはちょとしたエピソードがある。橋の名はこの町が生んだ法曹界の重鎮・穂積陳重の名に因む。宇和島藩士であった彼は、明治期に東京で法学者として名を成し、同郷の児島惟謙が例の「大津事件」※で苦境に立った際、三権分立の法理論で支えたりもした。その穂積の晩年、出身地で彼の功績を讃え銅像建築の話が持ち上がった。しかし、その際の彼の反応は、実に冷静な法学者らしいものであった。「銅像になりて仰ぎ見られるより、我れ足下にて踏まれん。」と橋の名くらいなら、ということで承諾したと言われる。こうして一九三〇年（昭和五年）橋は完成し、今も多くの宇和島市民がこの橋を通っている。欄干のデザインは、当時の風潮を反映したものか、アールデコ様式である。

宇和島市　穂積橋

写真⑤は、松山市内にあるレンガアーチ橋。特別に名も無いのであまり知られていないが、伊予鉄道の高架である。この橋の面白さは、レンガ造りであることもさることながら、道路と鉄道が直交せず、斜めに交差している為に、少しねじった形態で築かれていること。⑥の写真で判る通り、一個一個のレンガをうまくずらすことで調節している。施工上、現場で工夫して折り合いを付けたのだろうが、不思議な橋である。尚、レンガのアーチ橋は、県下では土居町とここの二ケ所のみである。



伊予鉄道レンガ橋

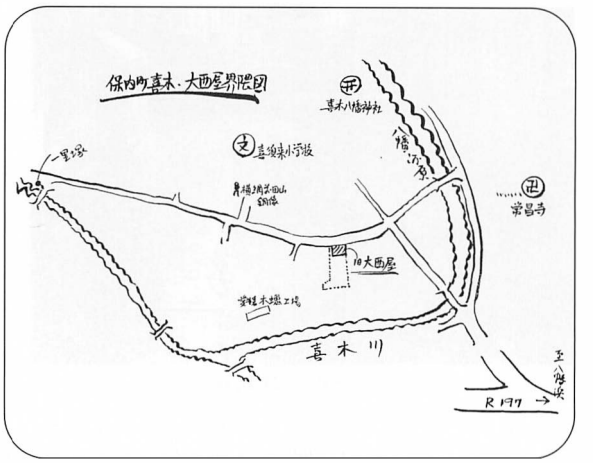
※「大津事件」
明治24年5月、日本訪問中のロシア皇太子ニコライが大津市で警備の巡査、津田巌蔵に襲われ怪我をした事件。大国ロシアの後難をおそれ、津田死刑の世論が高まったが、時の大審院長（最高裁裁判長）児島は行政の干渉を廃し、法の独立を守った。

旧大西屋解体顛末記

岡崎　直司

保内町に喜木という集落がある。かつては大変にぎわった町でもあるのだが、今はひっそり閑としている。

去る十月十三日、この町で最大級の木造家屋であった旧大西屋が取り壊された。地域にとって掛け替えの無い歴史遺産の一つが、こうして解体消滅する顛末を、少しドキュメントで追ってみたい。



九月二十八日　松山へ移動中に携帯電話が鳴り、菊池邸（大西屋）が解体されるとの第一報が保内町商工会から入る。急ぎ、土・日に実測調査が可能かどうか、各方面へ打診。

九月二十九日　善後策を講じる為、保内町並活性化委員会メンバー有志と現地菊池邸にて協議。週明けに解体業者が入るとのことで時間がない。その一方で、県歴史文化博物館に連絡を取り、民具、調度品、古文書等の調査依頼を打診する。

九月三十日　夜、保内大学の会合でも協議事項とするが、対案なし。松山と連絡が取れ、二日に実測調査と決まる。

十月二日　渡部佐紀男建築事務所及び和田建築設計工房の協力にて実測調査。県歴博からも谷脇、安永両女性学芸員の参加があり資料調査。岡崎が写真記録と聞き取り調査。

十月三日　所有者の菊池公孝氏（八幡浜市在住）に岡崎が調査及び部材（瓦や持ち送り）などの取りのけ保存の為、解体予定の延期を嘆願、交渉する。

十月四日　菊池氏より解体延期了承の連絡。ただし一週間、十二日より業者が入るとの事。

十月七日　県歴博学芸員による資料整理及び調査保管の為、歴博へ資料を搬出。

十月九日　町並活性化委員会メンバーによる主要な瓦の取りのけ作業。

十月十日　第二十二回全国町並ゼミ臼杵大会（十月八～十日）参加者約二〇名を保内に案内し、交流会の際に意見を聞く。

十月十三日　旧大西屋解体。記録撮影。

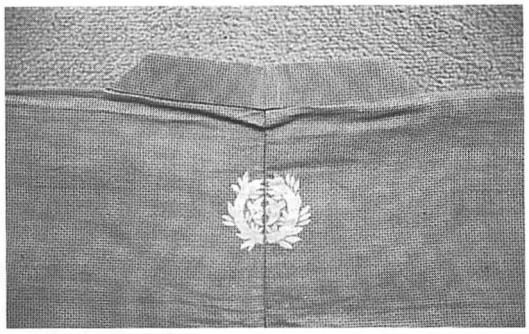
ここで、旧大西屋という建物がどのようなものであったかを、その歴史背景と共に言及してみたい。

今回の調査で、残念ながら棟札が発見されなかった為、正確な建築年が不明であるが、地元での聞き取り調査によると幕末期、約一五〇年前頃の建物といわれる。宇和島藩の有力な御用商人であった大西屋（清家姓）として建てられた。蠟座（ろう）役などもやり名字帯刀を許されていたという。藩の専売であった木蠟が、当時この地域では盛んだったらしく、大西屋はその中心に居た。

又、喜木という集落は江戸

旧大西屋　外観

期より牛市で栄えた。その規模は、今の喜木八幡神社横の八幡河原から一里塚辺りまでの喜木川に沿った河原、ほぼ集落を囲むスケール感で開かれていた。市は神社の春秋の祭礼時に開かれ、その三日間は博労が近郷近在は元より、九州宮崎、大分方面からも集まるほど四国一の大イベントであった。これも、元はと言えば大西屋のバックアップがあっての事らしい。



伊達家から拝領の麻裃（あさかみしも）
旧大西屋（清家家）に伝わり、竹に雀の伊達家の紋所が見える。

伊達家から拝領の提灯（ちょうちん）と袋
袋には大西屋の三ツ巴

喜木の大西屋か雨井の布袋屋か、と謳われた財力は、藩への資金援助にも功があり、後々明治になって川之石地区に県下初の第二十九国立銀行が設立されてゆく伏線ともなってゆく。

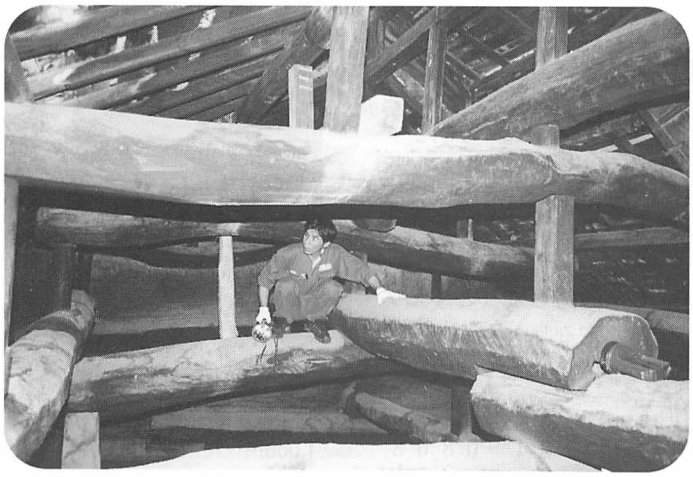
本瓦葺き二階建て、漆喰（しっくい）塗り込め造の堂々たる店構えは、建築当時、周囲を圧倒していたと思われる。士農工商の身分制度下では、破格の扱いであったことも伺える。

明治期に入り、同じ木蠟業の菊池家に所有が移り、現在に至るのだが、案外知られていないエピソードが実はある。菊池家は、当初菊池製蠟所を営んでいたが、戦時中に地元の三社が合併して愛媛木蠟となる。県下では最後まで木蠟生産を行っていた会社の一つで、業容は変わったが、今も社名は保内町喜木に残っている。この会社でかつて使用されていた木蠟関係の諸道具は、実は現在内子町の木蠟資料館に展示されている。

従って、木蠟産業を系統づけてまちづくりの中心に位置づけ、活かしている町と、片や残念ながら、その建物まで保全出来なかった町とで大きな差が出てしまったことになる。

旧大西屋の建物は凡そ六間に八間、雨漏りなどで傷んでもいたが、屋根裏に見る四重九連の大きな梁構造はビクともしていなかった。かつて、近くの天王山（てんのうやま）に樹齢三百年を越える松山があり、それを用材として建てたものと伝わってもいる。

何れにしても、保内の町に限らず、地域個性を大切にするまちづくりにおいて、そうした足元にある有用資源の活用は、基本的で重要な事柄である。他山の石とする意味でも、今現在、我々の周囲にころがっている目立たないものへの愛情あるまなざしに期待したい。



屋根裏の梁構造

★ＨＰアドレス

http://www.netwave.or.jp/~machicen/

★E-mailアドレス

machicen@mail.netwave.or.jp

どんなことでも構いませんので、皆さんのまち・グループの情報やこのＨＰのご感想などお寄せいただければと思います。

まちセンホームページ

平成11年８月１日より、まちセンＨＰを開設しています。

まちづくり関係者の気軽なアクセスポイントとして利用していただくとともに、県内外の最新のまちづくり情報を皆さんにお伝えできればと思っています。

新　着　情　報

「第12回地域づくり団体全国研修交流会」開催

地方分権の推進、ＮＰＯ団体の活動の活発化などにより、新しい時代を迎えようとしている地域づくり活動のありかたを語り合い、交流を深めるために、あなたも参加してみませんか。

■日時・場所　平成１２年２月１７㈭～１８日㈮
フォーラム：有楽町朝日ホール（有楽町マリオン11階）
研修交流会：グランドヒル市ケ谷（市ヶ谷駅より徒歩３分）

■プログラム　２／17　13:00～17:00　地域活性化フォーラム
（基調講演・事例発表・ディスカッション）
18:00～20:00　地域づくり団体全国研修交流会
２／18　9:00～12:00　研修交流会分科会
①住民参加によるまちづくり　②環境保全とまちづくり
③地域文化とまちづくり　④地域産業とまちづくり

■参　加　費　１人当たり　7,000円

■申込み期限　平成１２年１月１１日㈫

■申込み問い合わせ　県生活文化部ふるさと整備課（担当：大政）
（０８９）９４１―２１１１（内２１３９）

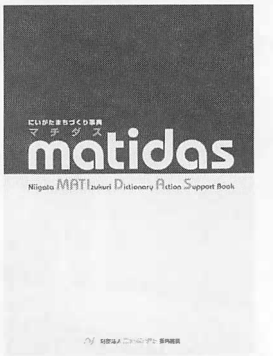
■財団法人ニューにいがた振興機構

『にいがたまちづくり事典　マチダス』発行

昨年、愛媛にも来ていただいた大滝聡さんたち新潟のまちづくりの現場で活躍するメンバーが共同執筆したまちづくり事典が出来上がりました。

まちづくりのコーディネーター役となって、活動しようとする人たちに活用してもらえるよう、まちづくりを考えるヒントやワークショップの手法、使えるシート、生きた実例が満載されています。

（購入申込み先）㈶ニューにいがた振興機構
地域支援担当　ＴＥＬ（０２５）２８４―０８０８



Ａ４版２色刷り　128ページ
1,000円（税込み、送料別）

■肱川町

『歌麿版画復刻展』

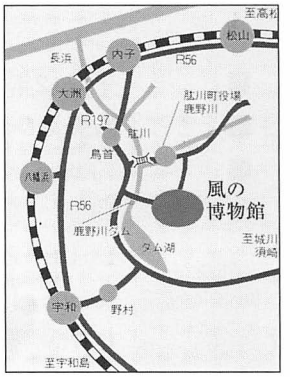
1月31日(月)まで
風の博物館にて開催

＜展示時間＞
午前9時～午後5時
＜休 館 日＞
毎週火曜日
＜問い合わせ先＞
「風の博物館」
（0893）34―2181

肱川町で全国で初めて発見された喜多川歌麿の浮世絵版木2枚をもとに復刻された版画などを特別展示している「歌麿版画復刻展」が開催されています。

発見された版木は、3枚続きの浮世絵「狐釣りの図」の左右部分で、真ん中の版画はアメリカのエルヴィエム美術館に所蔵されています。復刻に当たっては、検討委員会を設置しエルヴィエム美術館から写真を取りよせ、それを参考に専門家に色を検討してもらい、彫りと刷りの職人さんたちの手により、200年ぶりによみがえったものです。

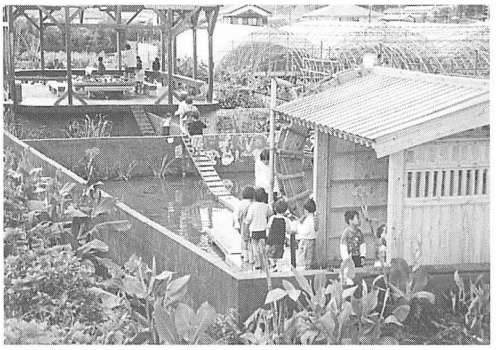
このほかにも、歌麿の浮世絵（復刻画）や彫り・刷りの道具なども展示されています。



■三瓶町

全国農村アメニティ・コンクール最優秀賞受賞

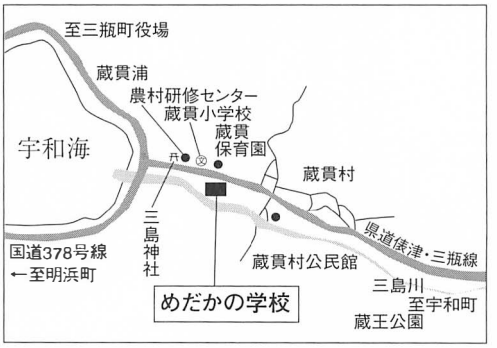
―「めだかの学校」などが評価―



11月12日に双海町東越で開催した地域ミニフォーラム「めだか考」に、三瓶町から「めだか会」代表の三好豊さん、発起人の菅原節一さん、「めだかの学校」校長の宇都宮長男さんの3人が来ていただいており、交流会でうなぎの養殖場跡の池を使って「めだかの学校」をつくられたお話をうかがいました。

その時に、先日アメニティ・コンクール審査員の浜美枝さんや木村尚三郎先生が来られたというお話をお聞きしていましたが、見事、最優秀賞に輝き、“おめでとうございます。”

三瓶町では、朝日文楽の保存・伝承、生活改善グループや女性塾の活動、さらには豚のロディオで有名な奥地の海のかーにばるや朝立川のイルミネーションツリーなど住民主体の活動が盛んで、それらが生活の中に活かされていることが高く評価されたようです。



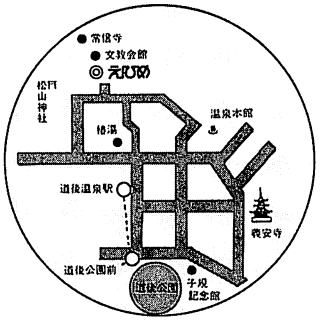
新年　明けまして　おめでとうございます

「えひめ地域づくり研究会議」2000年フォーラム開催
テーマ「いつまでも、安心して暮らせるまちづくりとは」
—少子高齢社会の２１世紀に向けて—

２０００年４月から、介護保険制度がスタートしますが、大切なことは、高齢者を含めて地域に住む人が、住み慣れたふるさとで、安心して暮らせることではないでしょうか。そして、このことが、まちづくりの原点ではないでしょうか。

阪神淡路大震災をきっかけに、市民の主体的な公益的活動が芽生えてきていますが、「安心して暮らす」には、人が元気になり、地域が元気になり、新しいネットワークが地域内で結ばれていることではないでしょうか。

そこで、えひめ地域づくり研究会議では、２０世紀最後そしてミレニアムの年次フォーラムを、まちづくりの原点に返って、考えてみたいと思います。



■とき　**平成12年１月22日（土）**

■ところ　**道後えひめ**（松山市祝谷町1-5-36）

■プログラム　13:00～ 受　付

13:30～ 開　会

13:40～ 基調講演：**大木　達栄**（O.W.L企画事務所・元社会福祉法人ふるさと自然村企画室長）

15:00～ 休　憩

15:15～ 鼎　談

鼎談者：**ヘロン久保田雅子**（タイムダラー・ネットワーク・ジャパン代表）

高岡　順子（サテライト型デイサービス生活指導員〈松山市〉）

河畠　登紀（研究会議運営委員〈五十崎町〉）

17:30　閉　会

18:00～ 交流会

■参加費　フォーラム 2,000円　　交流会 5,000円

■申込み　平成12年１月14日㈮までに

えひめ地域づくり研究会議事務局（㈶愛媛県まちづくり総合センター内）沖田まで

TEL089−932−7750　　FAX089−932−7760

皆さん、世間を騒がせた二〇〇〇年問題は大丈夫でしたか？終わりと始まりが交差する世紀越えの今年を意義ある年にしたいものです。

二十一世紀に残していかなければならないもの、変えていかなければならないもの、もう一度考えてみるのも良さそうです。

（檜垣）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790−0003
松山市三番町八丁目二三四
愛媛県生活保健ビル五階
㈶愛媛県まちづくり総合センター
TEL089（932）7750
FAX089（932）7760

発行／二〇〇〇年一月一日
㈶愛媛県まちづくり総合センター

印刷／三創印刷株式会社

本誌は、㈶愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。
URL:http://www.netwave.or.jp/~machicen/
E-mail:machicen@mail.netwave.or.jp